

第46回

人と大地に 魅せられて



北海道に移住して約10年。東京出身の私にとって、この地の暮らしは驚きの連続。
出会った人々、食や自然に魅了された数々の体験について取り上げます。
今回は、私と同じ時期に東京から北海道へ移住した絵本作家・橘春香さんにインタビューしました。

展覧会やトークショーなどイベントも積極的に開催している。写真は2023年11月に札幌市資料館で開催した原画展の様子。

心の中の鏡に札幌の景色が映り込んで

絵本作家になりたい、夢を追って

イラストレーターであり絵本作家でもある橘春香さんは、十年前に東京から札幌へと移住し、以来このまちで制作を続けている。橘さんの描き出す物語は、大切に引き出しにしまっていた宝箱をそっと開いては夢見心地になっていた、子どもの頃の感覚を思い起こさせてくれる。冒険をする主人公とともに入り込んだ世界は、摩訶不思議でありつつどこか懐かしさが感じられる。

橘さんは札幌で生まれ、生後まもなく、父の仕事の関係から横浜で暮らすようになった。幼い頃から、絵を描き、物語を考えるのが大好きだったそうで、いつしか絵本作家になりたいと思うようになった。武蔵野美術大学のデザイン科に進学。絵で食べていくのは難しいからと、両親の勧めもあった、まずはグラフィックデザイナーとして身を立てようと考えた。

「在学中にデザイン事務所で見習いとして働いていて、そこで他の作家の絵と文章をレイアウトしたことがありました。そのとき誰かの絵と文をデザインするよりも、私はやっぱり

東京都出身。美術の専門出版社で雑誌・書籍の編集に約20年携わり、2011年に北海道へ移住。

2018年に「森の出版社 ミチクル」設立。北の自然や人をテーマにした本を刊行している。イラストエッセイ『山を買う』など。



写真は橘さんの童話『銀杏堂』(偕成社)、『ボンぼうやはじめて見る世界』(PHP研究所)。新刊『LOVEってなに』(文・古川奈央、絵・橘春香、森の出版社ミチクル)が2021年12月に刊行された。

絵と文をつくる側になりたいと思いました」

卒業後はイラストレーターとして活動するようになった。また、数々のプロを輩出している「あとさき塾」という絵本作家養成講座にも通った。

そんな折、橘さんの絵に以前から興味を持っていた編集者から、絵本を出版しないかという誘いがあつた。書き溜めていたラフスケッチの中から内容を選び、二〇〇五年『こどももちゃん』という絵本が刊行された。

震災で気づいた、本当にやりたいこと

絵本作家として念願のデビューを果たしたが、その後の刊行は思うように進まなかった。イラストの依頼が

多く、まとまった制作時間が取れないまま、月日が過ぎていた。

「仕事をたくさんいたたくのはありがたいことでしたが、本当にこれでもいいの？ やりたいことができていないんじゃない？ って思いました」

悶々とした日々を過ごす中で、人生を揺るがす出来事に遭遇した。二〇一一年三月十一日、東日本大震災。グラグラと地面が揺れる中で、「自分の夢の一つが札幌に住むこと。それがまだ叶っていないのに、ここで死ぬんだらうか？」という思いが湧き上がったという。

札幌は祖父母が暮らし、度々訪ねたことのあるまちだった。若い頃ずっとここに住みたい。その思いを持ち続けていたことを思い出し、移住を決意。震災の翌年、札幌で暮らし始めた。

移住してから、落ち着いて制作できるときが取れるようになり、様々な物語が生まれるようになった。骨董屋の女主人が、自らお宝を探して旅した冒険談を次々と語る『銀杏堂』は、当初絵本としての刊行が想定されていたが、溢れ出る物語がページに収まらないことから、童話

として出版された。また、北海道の四季に触れる中で、春に一齐に植物が花を咲かせる様子に感動し、そんなシーンをラストに描きたいと『ボンぼうや』という童話を書いた。橘さんの創作は、一枚の絵のイメージが発端にあり、その一枚の絵には、どのような物語が前後にあるのだろうか。探していくことによって生まれるのだという。

札幌に住んで十年。環境を変えたことは、創作に大きな変化をもたらすものだったと今振り返る。

「心の中の鏡に、景色が映り込んで、それによって自分の心持ちも変わってくるように感じています。以前のようにイラストの仕事がたくさんやったり、東京に住んだりしていたとしても、楽しいと感じられたとは思いません。でも、やりたいこととズレているときは、何か足の裏がざわざわするような感覚があるんですね。今、自分のやりたいと思うことの真ん中に自分がいるという感覚があります」。

自分の気持ちに正直に向かいあい生きてきた橘さん。その勇氣と潔さは、冒険へと向かう物語の主人公の姿と、どこか重なると思った。